

独思録：「エジプト騒然」(2/6)

今泉 蓮

インターネットと云う、えに知れぬ怪力をかり、世界最古の文明を誇る国の中から、独裁という圧制が炙り出されるのを見て、この思いを得た。これを日本の現状と比較して書き下（おろ）したかったのはエジプトの状況とわが国の状況が余りにも乖離していると思うたからである。浅学にてエジプトの状況に通ぜず、従って文章に妥当性を欠き、描景真相を失する所が多かるう。読者の誨（おしえ）を待つ。

現在の話である。ムバラクと名乗る大統領が前サダト大統領の暗殺を期に軍を掌握し得て、30年近くにわたり、独裁政権を維持し、他を屠（ほふ）り天に驕（おご）りて二男であるガマル・ムバラクに大統領職を譲り、政権を世襲させる思惑だったと言う。

昔に帰れ。第四次中東戦争の頃と聞く。イスラエル軍防衛陣地への電撃作戦で戦局を有利に導き、国民的英雄となり、戦後、最高勲章である「シナイの星」勲章を授与され、サダト前大統領のもと副大統領に就任した頃に。

その頃の世情はあだには出来ぬ。国民の心に燃ゆる愛国の息を吹く為には、吾（おのが）肱（ひじ）をも折らねばならぬ、吾頸（くび）をも挫（くじ）かねばならぬ、時としては吾血潮さえ容赦もなく流さねばならなかった。そしてサダト前大統領は暗殺され、ムバラクが大統領に就く。

四半世紀前、倒れたサダトは大統領に向って伝えたはずである。我々が夢、叶（かな）えんとならば、限りなく親米、親イスラエル路線を踏襲すると。

サダト心得たりと胸に帯びたる理想を盟（ちか）い、アラブ社会の中で世に類（たぐ）いなきアメリカ、イスラエルと話せる国となりアラブと欧米の架け橋として揺ぎ無き国とする。しかし、古代エジプトから延々と養える誉高きアラブ社会の盟主として欧米からも一目置かれ、また、天上天下に政権の長きに渡り妨げるものはなく、遂（つい）に側近の声のみを得て、悉（ことごと）く国民の言うところを聞かず、独裁政治に陥る。

反政府デモの手と手を結ぶ熱き願いの鎖の端々（はしばし）に掲げられたるプラカードを読めば、虐げられた国民の切なる要求であった。今続く反政府デモとは国民の悲痛な叫びである。後ろ盾たるアメリカは既に大統領に退陣を促している。期限は無い。聞かねば大統領自身は無論の事、今後にかけてアラブの盟主というエジプトの威信すら守る事は出来ぬ。期限は無い。今日も待ち明日も待ち明後日も待つことができようか。時には欧米の仲裁を国民と共に待つ事もあるが遅い。大統領退陣の期はすでに満ちている。



<参照> 夏目漱石「幻影の盾」